

追 悼



故 阿部圭志 先生 略歴

(昭和8年4月22日生—平成25年12月21日没)

<学歴>

昭和27年 3月 岩手県立釜石高等学校卒業
昭和27年 4月 東北大学理学部教養部入学
昭和30年 4月 東北大学医学部医学科入学
昭和34年 3月 同上卒業
昭和34年 4月 東北大学医学部附属病院でインターン
昭和35年 4月 第28回医師国家試験に合格
昭和35年 4月 東北大学医学部内科学第2講座に研究生として入局

<職歴>

昭和39年 9月 東北大学医学部内科学第2講座助手
昭和48年 4月 東北大学医学部内科学第2講座講師
昭和58年10月 東北大学医学部内科学第1講座助教授
昭和60年 6月 東北大学医学部内科学第2講座助教授
昭和62年10月 東北大学医学部病態液性調節学講座教授
平成4年 9月 東北大学医学部内科学第2講座教授
平成9年 3月 退官
平成9年 4月 東北大学名誉教授
平成9年 6月 仙台社会保険病院院長
平成14年 4月 仙台社会保険病院名誉院長

<所属学会>

日本内科学会(理事 平成7年4月～平成9年3月, 評議員 平成5年4月～平成11年3月, 東北支部代表 平成7年～平成9年), 日本高血圧学会(理事 平成5年4月～平成11年3月), 日本腎臓学会(理事 平成4年12月～平成10年3月, 学術評議員 昭和51年11月～平成11年3月, 法人評議員 平成6年4月～平成11年3月), 日本内分泌学会(評議員 平成元年6月～平成14年3月), 日本循環器学会(評議員 平成3年4月～平成12年3月), 日本老年医学会(評議員 平成4年11月～平成14年3月), 日本心不全学会(評議員 平成8年9月～平成16年3月), 日本臨床分子医学会(評議員 平成7年4月～平成10年3月), 日本高血圧協会(理事, 東北ブロック世話人 平成19年10月～平成25年10月), American Heart Association, International Society of Nephrology, International Society of Hypertension, American Society of Hypertension

<学会運営>

日本腎臓学会第25回東部部会会長(平成7年5月12～13日)
日本高血圧学会第19回総会長(平成8年10月3～5日)

<賞>

平成19年度 日本高血圧学会第5回特別功労賞
平成26年1月 従四位 瑞宝小綬章

情熱と慈愛の師，阿部圭志先生

東北大学大学院医学系研究科内科病態学講座腎高血圧・内分泌学分野

伊藤貞嘉

阿部先生は骨髄異形成症候群により平成 25 年 12 月 21 日に逝去されました。先生から受けました数々のご恩に感謝するとともに、ご冥福をお祈り致します。

阿部先生は「日々研鑽」を座右の銘とし、疲れを知らない、努力と行動力の人でありました。早くから東北大学第二内科の国際化を推進し、多くの優れた人材を育成しました。学園紛争時代の第二内科教室の危機には陣頭指揮を執り、吉永先生が病院長、医学部長を務められたときは一身に教室を背負い、自ら教授になられてからは医学教育改革、大学院重点化などにその手腕を遺憾なく発揮されました。東北大学を退官し、仙台社会保険病院の院長に就任されてからは、経営手腕を発揮され、病院の発展に尽くされました。そして、仙台社会保険病院退職後は、同病院の名誉院長として、また、大崎市古川にある佐藤病院で多くの患者を診療なさり、いつもにこにこしながら「私の楽しみは患者さんを診ることだ」とおっしゃっておられました。先生は、いつも純粋で前向きで、その言動は厳しくも慈愛に満ちたものでありました。先生はフランク・シナトラのマイウエイを好まれてよく歌われていましたが、先生自身も、自分の信念に従って人生を立派に全うされました。

先生は昭和 8 年に岩手県釜石市にお生まれになり、昭和 34 年に東北大学医学部をご卒業、翌 35 年、鳥飼内科に入局されました。この年、チリ地震津波が三陸沿岸を襲い、大きな被害をもたらし、先生は関連病院の岩手県立山田病院の応援を命ぜられました。伝染病が流行し、また、脳卒中の発症が多かったとのことでした。そこで、先生は教室に戻られて吉永先生と一緒に高血圧の研究に取り組みられました。当時はレニン・アンジオテンシン系やカテコールアミンなどの昇圧物質の研究が盛んでありましたが、阿部先生はカリクレイン・キニンやプロスタグランジンなどの降圧物質の研究を開始されました。先生は世界に先駆けて、これらの物質の測定系を開発し、尿中に出現するこれらの物質は血液由来ではなく、腎臓内で合成され、腎臓内局所で作用することを明らかにし、パラクライン・オートクラインの概念を確立されました。このような先駆的な研究は国内外から注目され、数多くの国際学会に招待されるようになりました。この間、海外の一流の研究者との交流を深め、デトロイトのカルテロ、ニューヨークのマギフ、オーストラリアのジョンストン、テネシーのシェア教授などの、多くの研究室に教室員を留学させました。このような先生のご活躍とご指導により、第二内科の国際化が格段に促進されました。

阿部先生は後輩の面倒見がよく、行動力に溢れた人でした。昭和 40 年代初めの学園紛争時代には、入局者がほとんどなくなるという危機的状況に陥りました。阿部先生は学生の下宿や病院を訪れて、第二内科への入局を熱心に勧誘して回りました。そして、教室の団結力を強めるため、野球の早朝練習を行い、ついに、平成 2 年には教室委員会の野球大会で優勝の栄誉を勝ち取りました。また、バーベキューパーティーなどで教室員を自宅に招待し、宴会をすることも多かったのですが、翌日、誰よりも早く研究室に現われるのは、決まって阿部先生でした。また、早朝ミーティング、日曜ミーティングなどを開催し、全く疲れを知らない活動で後進を引っ張っていかれました。その研究成果は国内外の多くの学会や学術誌で発表され、先生ご自身も日本高血圧学会、日本腎臓学会東部部会などの会長を務められまし

た。また、平成9年には、日本内科学会学術総会において「高血圧の病態と治療」と題し、先生の研究の集大成を宿題報告として発表されておられます。

阿部先生はいつも前を向いて、全力で進んでこられました。阿部先生が大学を退官された後に、阿部先生を囲む「向志会」が開催されていました。この向志会は決まって阿部先生の講義から始まるものでした。先生は、佐藤病院で診察している患者をつぶさに解析し、家庭血圧の変動性に関する知見についての論文も書かれました。会員一同、先生の研究や診療に対する姿勢に感銘を受けたものでありました。また、高血圧協会の理事として市民の啓発にも取り組んでこられました。平成25年の、11月16日に開催された高血圧協会の市民公開講座では、発熱をおして素晴らしい特別講演をなされました。そして、その後ほどなく大学病院に最後の入院をすることになった次第です。

筆者は入局3カ月経ったある日、阿部先生から「伊藤君、君には来年デトロイトのオスカー・カルテロのところに行ってもらうから、それまで、何でもいいから英語の原著論文を書くように」と言われました。渡米後、毎日苦闘の連続でしたが、結局、2年半後にレニン分泌の緻密斑機序を世界で初めて直接証明する成果をあげることができました。筆者はその後いったん帰国しましたが、阿部先生と吉永先生の寛大なご配慮で、2年半後に再び米国に渡り、尿細管糸球体フィードバックを直接可視化することに成功しました。その間、先生は筆者の研究の成功をわが事のように喜んでくださいました。平成9年筆者が教授になったとき、先生に「なぜ、入局したての僕を海外に送り出すことに決めたのか」と質問をいたしましたところ、以下のように答えられています。「僕はこれまで多くの者たちを指導してきたが、当時から、自分の手垢を付ける前に世界に出して、一流の世界を肌身で感じさせることが大切だと考えていた。苦勞するだろうが、真に世界で活躍できる人材育成には、それが不可欠である」と。この当時、阿部先生はすでに「世界の阿部」であり、国際的舞台で活躍なさっておられましたのに、このお言葉です。とても謙虚な態度で、先を目指す先生の真摯な姿に、大きな感銘を受けたことが昨日のように思い出されます。確かに、阿部先生は多くの教室員を若くして海外留学に出しておられました。これも、受け入れ先における阿部先生への信頼感が絶大だったことを物語っております。

最後に、筆者は阿部先生が大学病院に入院している間、何度か時間を共に過ごし、思い出話や筆者の近況報告、そして将来のことなどを語ることができました。熱があり大変な状況でも、いつも、「ああ、伊藤先生、よく来てくれました。」と、いつもの笑顔で迎えていただきました。筆者の手をしっかりと握って、「これからの世代をよろしく頼む。」と。むしろ、筆者のほうが励まされてしまいました。

阿部先生は向志会で、後藤新平の死の間際の言葉を引用されて挨拶をされたことがありました。すなわち、「よく聞け、金を残して死ぬ者は下だ。仕事を残して死ぬ者は中だ。人を残して死ぬ者は上だ。よく覚えておけ」という言葉です。

阿部先生は自分で最大限の努力をするとともに、常に次世代に希望を託しておられました。偉大な師を失ったことはとても残念であります。

ご冥福をお祈り致します。